

パレスチナで循環を考える

昨年より JICA 技術協力プロジェクト「持続的農業技術確立のための普及システム強化」にかかわることになり、パレスチナ西岸地区をなんとか訪問する機会をもった。イスラエルによる占領政策が継続するという厳しく、著しく選択肢のせめられた現実のなかで農業生産・経営を安定させていく対処策を普及強化の観点もからめつつ模索・検討している。担当する畜産分野のテーマのひとつとして購入飼料への依存した生産体制からの脱却がかかげられている。畜産は有機的な耕畜連携を模索するうえでの要となり、そこでキーワードのひとつとなっているのが循環である。

おりからの原油価格高騰もありパレスチナの農民のなかには高価な穀物飼料への依存をやめて、より低コストで安定した家畜飼養を指向していこうとする機運がひろがりつつある。農民個人の圃場や地域レベルでの飼料の自給生産を立脚点にすると、マメ科牧草の導入、マッシュルーム菌床の飼料化、集水技術による草地改良、作物残さの利用、サイレージやフィード・ブロックの貯蔵飼料製造などが農民たちの検討課題となる。そこでは居住地周辺の自然資源への再評価を前提に未利用・低利用資源の飼料化の促進をはかることが基本方針であり、資源循環を成立させるための適応化試験、現地技術の開発・整備がもとめられている。パレスチナ農業にはムギ作とヒツジ・ヤギ飼養の伝統的な複合有畜経営の基盤があり、地域資源の有効利用のもとで経営を安定化させていくことをめざしている。それはパレスチナの農家にとっては無為に捨てられてきた資源の再利用であり、言ってみれば「もったいない」精神での循環の再意識化である。

また、高度成長以前のふるきよき日本の農業形態やこんにちの有機農業運動であっても個人・地域レベルで出発するという意味において上述のパレスチナでめざしている循環とおなじで共通の発想にたっている。ところで、循環の強調はちょっとわれわれ日本人の心の琴線にふれる言葉なのか、最近では各方面でさかんに循環技術が議論され、たんに美しいキーワードとして氾濫・多用されているくらいがあるようにおもう。たとえば、日本の畜産でトウモロコシや大豆など穀物飼料への輸入依存からの脱却をめざすといった場面で見られる循環はどう考えたらいいのであろうか。外国からの穀物飼料の大量輸入、効率をひたすら追求した集約型畜産の帰結として家畜糞尿の集積化。こうして大量にもちこまれたものをいかに「処理」するかという次元の問題がおなじように「循環」という言葉でもって安易に語られることに多少なりとも違和感があるのである。ここでは穀物飼料の輸入を極力削減し、自給飼料の割合を高めつつ環境負荷要因を取りのぞいていくことがより根本的な処方箋といえるのではないだろうか。なにもかもひっくりかえり循環だけを美しく強調するのは問題のすりかえであり本質をひずめているように感じる。

ケニアのマータイさんの「もったいない」は 3R の精神で表現されるという。すなわち Reduce (減量), Reuse (再利用), Recycle (再処理) の 3 つの R であるが、相対的に前二者の比重が三番目の Recycle より高く、もっとも重要なのは一番目の Reduce であろう。物質文明にどっぷりつかったわれわれ現代の日本人に切実に求められているのは、まずは「減量」であり「低負荷」への舵とりではないかとおもう。(古賀 2009年4月)



作物残さによるサイレージ製造



マッシュルーム菌床の飼料化



ヨルダン渓谷での放牧

第6回：まとめ

本シリーズでは、JICA 筑波における野菜栽培技術研修の中で取り上げてきた現地適用の可能性が高いと思われた日本の栽培技術導入による調査事例を4回にわたり紹介してきた。研修員は日本の栽培技術を適用して、地域の野菜栽培問題解決を図るため、個別実験の中でその技術の体験と評価をおこなってきた。以下に、これまで紹介した内容をまとめた。

研修員国	地域の野菜栽培問題	対応する栽培技術等	現地適用課題
フィリピン	トマト栽培における土壌病害	接ぎ木技術	接ぎ木による収量・品質への影響。接ぎ木と順化技術の訓練。経済面での検討。台木の入手。
ニカラグア	パレイショ栽培における優良種イモ不足	体系的種イモ生産と配布システム	輸入種イモの品質管理の確立。適正サイズの評価試験と展示圃による普及技術の紹介。
サモア	トマトの放任栽培における低収量	整枝・誘引栽培技術	整枝・誘引作業による労力・経済面の影響。芯止まりトマトの誘引手法の開発。
モンゴル	キャベツ栽培における難防除害虫害	選択性農薬や異なる剤の輪番使用	総合的病害虫防除について組織だった研究と展示圃による普及技術の紹介。

この他にも、エチオピアの乾燥地域における定植トマト苗の低活着率問題に対応するための練り床育苗、ケニアでは廃棄物とされた養鶏糞の発酵による有機肥料製造、ニカラグアの有機栽培における害虫害に対するマルチ栽培（シルバーマルチ）などの日本栽培技術を取り上げ、研修員の抱える栽培上の問題解決に取り組んできた。研修員はこの様な技術について知識としては多少持っていたが、実際の栽培に適用した経験は乏しい。研修では、まず野菜栽培の基本技術の習得をはかり、その応用技術として篤農家の経験・知恵を学び、自国の栽培環境への適用性について評価・検討するようにした。しかし、現地での適用に際しては種々の課題が想定された。

挿し接ぎ・整枝誘引・練り床育苗や鶏糞の醗酵などの技術には特別な資材や機器を必要としないため、現地での適用は容易と考えられる。一方、選択性農薬やシルバーマルチなどの資材、および種イモ生産体系のようなシステムの構築を伴うものは適用が難しい。日本の栽培技術を現地で適用していく上では、現地の自然環境および営農条件での技術の再評価が共通の課題と言えるが、この課題を克服するための手法として、一昔前の日本の技術普及（国や県の研究員が農家の技術導入に対し積極的に関わり、農家も日常の営農の中で考えた工夫を研究員に紹介することによって次の技術開発へと繋げ、普及員との連携により、技術開発と普及の輪を上手く回していた）の方法がお手本となるだろう。

日本の栽培技術を学んだ帰国研修員が、習得技術をベースに現地で適用可能な技術を確立し、その技術普及に取り組むことが研修の成果として期待されていることを考えると、個別実験結果の現地での適用に必要な工夫の再検討に十分なフォローアップが必要と考えられる。しかし、フォローアップが十分に実施されていない状況では研修員の帰国後の活動の本当の課題が見えてこない。このような課題を解決する方法として、研修とフォローアップをペアにした研修形態の実施が必要と考える。さらに、以前にも述べたように、技プロ等の他のスキームとの連携強化も考えられるであろう。

日本の栽培技術や篤農家の知恵の中には、身の回りの資源を活用する方法を考案し有効利用を図っている技術や知恵が沢山あり、途上国においても適用できるものとする。「本邦での技術研修への実施」と「研修員の国々での多くの活動」の両方の経験を持つ当社としては、多くの課題を克服していかなければならない研修員に対して真に役立つ技術協力を展開していきたい。

日本農業の今と国際耕種の関わり方

最終回：国際耕種の関わり方～始まりのためのエピローグ

本シリーズでは、国際耕種と関係のあった農業生産現場に関わる人たちの声を聞きながら、日本の農業が抱えている深刻な問題点や課題、たとえば、耕作放棄地、自給率低下、後継者不足等に対し、今後進むべき方向性や国際耕種の日本農業への関わり方や可能性などを探るために取材を重ねてきた。シリーズの最終回を迎えるに当たって、これまでの4つの取材事例を通して考えたことや、その後の活動および議論を通して得られた活動方針などを以下のような表にまとめてみた。

事例	シリーズの中で既に述べた活動方針	その後の活動や議論を通して新たに考えられた支援・協力
里美 (茨城)	有機野菜の定期購入、月例会への飛び入り参加、グループメールによる情報交換、交流会等のイベント開催、農家のネットワーク化を通じた資源循環型農業の促進	里美での有機農業を対象とした、大学等の研究機関との連携の下での、持続的な資源循環型農業システムをテーマとした調査研究活動への参画・協力
牛窓 (岡山)	若手就農者に対する農業研修の実施、新規就農希望者に対する宿泊施設や交流の場の提供支援、海外研修員や補完訓練生の受け入れのための斡旋業務	国際耕種のホームページ上に設定する情報交流の場を利用した牛窓グループの販売促進への貢献、他の有機農業者グループとの交流会等のイベント開催
甘楽 (群馬)	甘楽、牛窓、里美の有機農業者が情報を共有し、そこから共に学んで、将来的には連携して活動が出来るようになるための貢献	自然塾寺子屋で実施されている農村フィールドワーカー養成講座に直接間接に関与して、我々自身の農村調査手法の習得や我々の現地経験を研修の実施に生かすことでの貢献
浜松 (静岡)	農業ビジネス経営体の人材育成プログラムへの直接的貢献とそれを通じた生産性向上、耕作放棄地の活用、農地保全等への間接的貢献	有機農業者グループにとっても農業ビジネス経営体にとっても重要な要素となるマーケティング分野における情報共有のためのイベント開催等を通じた貢献

このシリーズも耕作放棄地の話題から始まったように、現在の日本農業の大きな問題点の一つは、農業者の高齢化や農産物価格の低位安定、後継者不足・就農者不足および耕作放棄地の増加、それらに起因する農村地域の活性低下がある。これらの点も考慮に入れながら、これまでの取材の中から国際耕種が今後関わっていく上で、いくつか重要なキーワードになりそうなことが挙げられる。一つには「モチはモチ屋」(第65号・浜松)ということ。つまり「作る」(農産物の生産)部分はすでに生産に関わっている人たちに任せて、国際耕種は営農に直接関わらないということが現実的な対応であろう。さらに、「作る」と「売る」との間でできることを探す(第65号・浜松)ということ。これは、戦後から近年までにおいて、本来は農協の役割であったことであるが、近年の商業の多様化で流通形態が変わってきている現実ではその肩代わりが求められている状況があり、そのためには新たな組織的対応も必要で、NPO設立等の動きが浜松や牛窓でも起きつつある。こうした動きに国際耕種がどう関与できるか、が一つの重要な課題である。

このような動きにも関連するが、もう一つの重要なキーワードは、「人材(後継者)育成」である。人材育成に関わる動きとしては、牛窓における後継者育成プログラム(第63号)、浜松の人材育成プログラム(第65号)に加えて、甘楽・自然塾のJOCV技術補完研修受入れ(第64号)等も今後農業に関わっていく人たを育成・支援しようとする動きである。また人材育成(後継者養成)の一つの手法として「技術研修」も考えられるが、こうした分野も含めた上での国際耕種の関与の可能性を探っていくことが今後の課題である。

このシリーズの中で、農協の本来の役割の肩代わりにつながるような、農家の組織化やビジネス化をめざすNPOも紹介した。国際耕種は海外での農業・農村開発において、現地NGOとの連携によって小規模ダム建設や家庭菜園プロジェクト等の支援を行ってきた。また、10年間携わってきた筑波での野菜栽培・稲・畑作物栽培技術研修で、帰国研修員達とのネットワーク構築によるフォローアップの重要性も認識してきた。国内における取り組みにおいても、キーワードとしては、「つなぐ」ことや「ネットワーク化」が重要であり、こうした連携やネットワークを活用していくことが有効と考えている。さらに、国際耕種がこれまで関わってきた国内外での研修や普及業務では、Face to Faceでの活動が重要であることも経験している。このように包括的且つユニークな経験をフルに活かして、今後とも日本の農業に深く関わっていききたい。

取材先、それぞれのその後

さて、こうした活動に具体的に関わっていく前の準備段階のステップとして、それぞれの団体と関係を継続することが一番重要なことであり、相互に補完できる協力の場を見出していくことが関係継続につながるであろう。例えば里美の月例会には時々社員の誰かが参加する。牛窓では放棄家屋の借り上げを積極的に支援する。甘楽ではフィールドワーカー養成講座に参加してみる。浜松では人材育成プログラムへの貢献を模索する。こうした関係を推進する中から次の展開となり得る活動分野を開拓していくことになるだろう。そのように考えると、取りあえずは4団体を集めた情報交換会の実施をアレンジすることが国際耕種にとってもそれぞれの団体にとっても意味があるかも知れない。本シリーズで取材した各地との交流状況や現地での最近の動きについて簡単に追記する。

里美（茨城）

- ・ 里美グループに対し、JICA 筑波野菜栽培技術コースの研修員受入れを要請し、有機農業を通じた栽培技術の実際を体験する研修プログラムを実施した。具体的には、参加研修員に対して身の回りの有用資材活用について里美のケースを紹介してもらった。
- ・ また国際耕種では、宅配有機野菜を里美から定期的に購入している。

牛窓（岡山）

- ・ 2008年11月に、「本気で農業を語るシンポジウム」及び「地産地消フォーラム」が牛窓グループや岡山大学などが主催となって開催され、国際耕種からも参加した。
- ・ 昨年度実施した新規就農支援プロジェクトや農業体験を通して4人が新規就農することになった。4人も瀬戸内農業経営者クラブに入る予定と聞く。

甘楽（群馬）

- ・ 今年もJOCV 技術補完研修受入れを行い、野菜隊員及び村落開発隊員候補生の受入れを行っている。
- ・ 筑波での研修事業への共同実施を検討した。残念ながら今回は実施出来なかったが、今後の協力関係の可能性を探ることになり得た。

浜松（静岡）

- ・ 企業的農業経営を担う人材を育成するための「静岡農業ビジネス企業人育成講座」が、静岡大学や県産業界との産学協同によって2009年4月から開始された。浜松のSさんやKさんもメンバーとして参加している。



本気で農業を語るシンポジウム



産地直送大市(ワッカファーム)



地産地消フォーラム

ところで、「鉄腕ダッシュ村」というテレビ番組がある。TOKIOのメンバーが自分たちの村を作ろうというプロジェクトで、古い民家を修復し、田畑を整備して耕し、自分たちで野菜を作り、米作りに汗を流し、秋には収穫を喜ぶ。しかし、このような農業や田舎暮らしにあこがれながら、なかなか実行できないのが現実である。一方、半農半漁ならぬ「半農半X」（「X」にはさまざまな職業、活動が入る）という生き方がある。農業にできる範囲で関わりながら、自らのミッションも遂行するという生き方は、農業をなりわいとしている専業農家からみれば「片手間」の「遊び」に見えるかもしれないが、このように多様な形で農に関わるしくみを作ることによって「農の底辺」を広げる努力も必要かもしれない。